

英語科学習指導案

串木野市立羽島中学校

対象学年 1年A組(男子16名 女子9名 計23名)

日時 平成14年9月30日 第5校時

指導者 教諭 清木場 剛

- 1 題材 Sunshine English Course 1
Program 6 同じこと、違うこと

2 指導にあたって

(1) 題材について

本課は、由紀のアメリカ生活が本格的に始まり、散歩中にアイスクリームを食べたり、アンディの友だちをみかけたりする場面である。アメリカの日常生活や学校生活を知る上で参考となる題材で、生徒たちにとっては興味深いものと思われる。この題材を通して日本との違いに目を向けさせ、それらについて自分から進んで理解しようとする意欲を起こさせたい。また、言語材料として三人称単数を主語とする一般動詞を用いた文を初めて学習する課であり、文法事項の説明に偏りすぎないように留意し、英語で表現する場を多く設けながら、言語形式の定着を図りたい。そして自分の家族や友人について内容を整理しながら紹介するというタスク達成を目標に取り組みせ、表現の成就感を味わわせたい。

(2) 生徒の実態について

本学級の生徒は元気があり、活発な生徒が多い。英語の授業においては、全体での音読など大きな声を出し、カードゲームやインタビューなどの言語活動には特に意欲的に取り組んでいる。しかし、個人の発表では、自信のなさや恥ずかしさなどから、小声になる生徒も多い。発表の機会を数多く設定し、賞賛したり、励ましたりすることで、間違いを恐れず意欲的に発表しようとする態度を育てたい。また、能力はあるが、授業への基本的な取り組みの姿勢に真剣さを欠く生徒や英単語や文法の決まりなどを覚えることに抵抗を感じている生徒も見られる。それらの生徒に対しては、学習の仕方や各課のタスクなどを具体的に指導し目標を持たせることにより、各自が持つ学習への意欲を伸ばしたい。

今後、一人一人のつまずきに対応し基礎基本の定着を図りながら、コミュニケーションへの意欲的な態度やコミュニケーション能力を育成する英語学習指導に努めたい。

3 指導の重点「話すこと」

4 本課の目標

- (1) 本課の概要・要点を理解し、それらについてJTEやALTの質問に答えられるようにする。
(2) 次のような重要文に習熟させ、これらを用いて身近な人や簡単なことについて積極的に表現できるようにする。
- ① I like oranges. Nancy likes oranges too.
 - ② Does Ken like jogging? Yes, he does. No, he doesn't.
 - ③ Who's that boy? He's Andy.
- (3) アメリカの日常生活や学校生活などの学習を通して、日本との違いに目を向けさせる。

5 評価について(「指導と評価の一体化」の工夫)

基礎的・基本的な内容の確実な習得を図り、自ら学び自ら考えるなど力などの「生きる力」を育成することを基本的なねらいとして、学習指導要領が改訂された。英語科においても実践的コミュニケーションの基礎を養うということに重点が置かれ、中学校では各学年とも「聞くこと」「話すこと」をより重視することとなった。そして評価においても、評定までも含めて目標に準拠した評価、いわ

ゆる絶対評価で行うことと変更された。これにより、観点別学習状況の評価のあり方が改めて問われることとなった。このような経緯を踏まえ、本校英語科においても観点別学習状況の評価規準の研究に取り組んでいる。

第一学年の本課の指導における評価については、第1時から第7時までの評価規準表を作成し、評価の観点を絞り、毎時間の評価を行ってきた。評価規準表の作成にあたっては、それぞれの時間の中心となる学習活動に対する評価となるように規準を設定した。このように、学習の過程における評価を計画し継続することで、評価の信頼性を高め、指導の改善に生かすことができると考えた。

また、第1時ではこの課の目標及び学習の流れを生徒に提示し、この課を学習することによって何ができるようになればよいのか、またそのためにどのような学習をすればよいのかを理解させ見通しを持たすようにした。また、自己評価カードにより、生徒が評価することにより、自らの学習状況や目標に対する到達度に気づき、その後の学習が促されるように工夫した。

今後、信頼性のある妥当な評価に近づけられるように、実践を重ねていきたいと考えている。

6 本課の指導計画及び評価計画 別紙資料

7 本時の実際（6／7）

（1）本時の目標

- ① 三人称を用いて、自分の家族や友人について紹介することができる。
- ② 友だちの発表についての英語の質問に答えることができる。
- ③ 間違いを恐れず、大きな声で積極的に発表や応答ができる。

（2）本時の実際

区分	主な学習の流れ	教 師 の 活 動	指導上の留意点及び評価（○） （ ）はCレベルの生徒への手立て
導 入 5'	<pre> graph TD Start([Start]) --> Greetings[Greetings 1] Greetings --> Warmup[Warm up 2] Warmup --> Aims[Aims of this period 3] </pre>	1 英語で挨拶し、簡単な英語の質問をする。 2 既習の重要文を用い、英語で質問する。 (Line Game) 3 本時の学習目標を提示し確認させる。 英語で家族や友人について紹介し合おう。	・ 英語学習の雰囲気を作る。 ○ 本課の重要文を正しく用いて表現できたか。 (ワークシートを見直し、確認させる。) ・ これまでの学習の流れ振り返り、本時の学習目標を確認させる。
展	<pre> graph TD Model[Model Presentation 4] </pre>	4 モデルの紹介文を発表し、その内容について英語で質問する。 5 紹介文の発表を援助し、	・ 発表の態度や方法など留意点を確認させる。 ・ 必要に応じ、発表や英問英答を

開 40'		評価をする (1) 順番に家族や友だちについての紹介文を発表させる。 (2) 友だちの発表をメモを取りながら聞かせ、相互評価表を用い評価させる。 6 友だちの発表に関して英語または日本語で簡単な質問をする。	援助する。 ○ 発表の内容や態度はよいか。 本時の評価項目〔コミュニケーションへの関心・意欲・態度、表現の能力〕について、評価規準に従って評価する。 (最後まで発表できるように支援する。) ○ 聞く態度は良いか。 ・ 発表の良い点をコメントとして取り上げ、意欲を高める。
終 末 5'	No Yes 6 No Yes 7 No Yes Comments & Assignments 8 Stop	7 今日の学習を振り返り自己評価させる。 8 コメントを聞き、家庭学習の内容を提示する。 9 終わりのあいさつをする。	○ 自分の学習を振り返って、自己評価しているか。 (自己評価表を回収し、より努力すべき点についてコメントする。) ・ 生徒の良かった点をコメントし、成就感をもたせ、今後の意欲づけとする。

(3) 評価

- ①三人称を用いて、自分の家族や友人について紹介することができたか。
- ②友だちの発表についての英語の質問に答えることができたか。
- ③間違いを恐れず、大きな声で積極的に発表や応答ができたか。

8 成果と課題

(1) 成果

《評価を念頭に置いた指導計画》

課の指導計画を作成するにあたって次のような点を考慮しながら進めた。

- ①課の目標は何か。
- ②課の目標達成のためにどのような流れで学習していくか。(課の指導計画作成)
- ③各時間毎の目標達成のためにどのような学習形態でどのような言語活動を行うか。
- ④各時間毎の中心となる活動で評価する観点は何か。
(4つの評価の観点のどれを評価するか。)
- ⑤評価規準をどのように設定するか。(評価規準表の作成)
- ⑥適切な評価方法は何か。
- ⑦評価をどのように授業に生かすか。

この中で、「④各時間毎の中心となる活動で評価する観点は何か。」を明確にすることは、授業中の言語活動を再確認することにつながった。例えば、生徒が実際に話したり書いたりする言語活動を行った上で表現の能力を評価しているか、生徒が実際に聞いたり読んだりする言語活動を通して理解の能力を評価しているか、また生徒が実際に生徒がコミュニケーションを行う場をきちんと設定してコミュニケーションへの関心・意欲・態度を評価しているかなど自己点検する良い機会となった。

更に、評価規準表の作成にあたっては、その規準を到達基準のB（おおむね満足できるもの）と考え、より具体的なものになるようにした。これにより、各時間の目標がより明確になり、生徒に対し「何がどれだけできればよいか。」を具体的に示すことができたことは、生徒の意欲を促す意味で非常に良かったと思われる。

《課の目標及び学習の流れの提示》

第1時の授業後に行った「この課の学習の流れがよく分かりましたか。」という質問に対しては23人中22人がよく分かった又はとても良く分かったと答えており、感想の中には「この課の進め方は楽しい」という感想も見られた。第2時以降、課の目標及び本時の目標を毎回確認しながら授業を進め、第6時においては、生徒全員が8文以上の家族や友人についての紹介文を発表することができた。課題の解決に向け、生徒それぞれが見通しを持って学習を進めることができたのではないかと考える。

《自己評価カード、相互評価カードの活用》

自己評価の評価項目としては、言語活動への意欲に関するもの及び本時の目標に関するものとなるように具体的に項目を設定しさらに授業の感想を記述させるようにした。そして、授業後にカードを回収し、評価状況を確認した。そうすることで生徒が自分の到達度をどのように考えているか、また生徒の評価と教師の評価のずれがどれくらいあるかをとらえることができた。また、「Doesn'tの使い方がまだ理解できなかった。」「英語の質問に対する答え方が難しかった。」「最初はlikeとlikesの使い分けがよく分からなかった。」など自分のつまずきに目を向ける感想や「たくさんの文を書いたので暗唱できるか心配だ。」「早く紹介文を発表したい。」など次の時間へ目を向けた感想などさまざまな感想があり、課の目標の達成に向けて有効なものであったと考える。相互評価カードに関しては、今回友人の発表を3つの観点（声の大きさ、目線、流ちょうさ）で評価させることで、生徒が発表の際にそれらを意識している様子が見られた。

《補助簿の活用》

評価規準表に従い各時間毎に実施する評価については、補助簿に記入し、第1時から第7時までの累積を行い、4つの評価の観点それぞれに課全体としての評価が出せるように工夫した。この各課毎の評価を積み重ねて、学期の評価、学年の評価に結びつけたいと考えている。

（2）課題

今回の実践を通して、評価計画を立て生徒の到達度をチェックしながら指導を進めることは、学習者にとっても、見通しを立ててまた意欲を持って学習するという点で、非常に重要であることを実感することができた。しかし、適切に生徒の学習状況を捉え評価できたかどうかは不安な面が残った。具体的には、質問などへの回答率や生徒が書いた文章などをもとに表現や理解の能力を評価するのに比べ、言語活動中のコミュニケーションへの関心・意欲・態度の評価は非常に難しいものであった。この点の解決にあたっては、信頼性を高めるために評価を継続し積み重ねていくことが大切であると考えている。そして、生徒の実態に即して各学年の目標や内容がきちんと設定されているか、学年の段階を踏まえて指導計画や評価計画が設定されているかを再検討することが、今後の大きな課題の一つである。また、自己評価表や相互評価表などを授業や教師の評価にどのように生かしていくかということや補助簿の工夫など、今後研究し実践を重ねていきたい。